『比較民俗研究』26. 2011／6

書　評

山田勅之著　『雲南ナシ族政権の歴史－中国とチベットの狭間で』

高倉健一※

本書は、現在の中国雲南省北西部地域を中心に住んでいる少数民族ナシ族の、14世紀から17世紀にかけて「木氏」を中心としたナシ族政権が中華世界とチベット世界の狭間に位置する地理的環境を巧みに利用して外交活動を行っていた歴史的事実について、木氏土司・中華世界・チベット世界の3者がそれぞれ残した史料を用いて明らかにしたものである。

ナシ族は、総人口が約31万人と中国政府が現在指定している55の少数民族の中でも人口が少ない部類に入る民族である。その小さな民族集団が、中華世界とチベット世界という大きな勢力と巧みに外交を行うことで自身の勢力を保ちながら更に拡大していったという歴史を、これまでの研究で用いられてきたナシ族や中華世界の漢文史料に加えて、チベット世界のチベット語史料も用いて明らかにしているところが本書の特筆すべき点である。

本書の構成は次の通りである。

序章
　第一節　時代背景と雲南麗江ナシ族・木氏土司
　第二節　先行研究と本論の視座―前近代の国家と民族の捉え方
　第三節　使用する史料について
　第四節　本書の構成
第一章　土司制度の歴史的変遷と従来の研究
　第一節　土司制度の歴史的変遷
　第二節　土司の位置づけとその義務
　第三節　従来の研究
第二章　『木氏宦譜』『皇明恩綸録』に対する史料批判
　第一節　両史料の性格と先行研究
　第二節　両史料の基礎的な比較分析
　第三節　両史料の比較対照
まとめ
第三章　土司の義務から見た木氏土司と明朝との関係
　第一節　本省の目的と従来の研究
　第二節　木氏土司による朝貢の目的
　第三節　木氏土司の賦税の目的
　第四節　木氏土司の軍事行動と助餉
　まとめ
第四章　チベット人居住地域への勢力拡張
　第一節　木氏土司の軍事行動と従来の研究
　第二節　中甸方面への軍事行動
　第三節　ムリへの軍事行動
　第四節　支配の実態―徴税を中心に
　まとめ
第五章　木氏土司とチベット仏教・カルマ派との関係
　第一節　従来の研究と時代背景
　第二節　チベット語史料から見た木氏土司とカルマ派との交流
　第三節　麗江の仏教建築建設の目的と機能
　第四節　麗江版カンギュルから見た木氏土司とカルマ派との関係
　第五節　交流の意義
　まとめ
第六章　麽些居住地域への勢力拡張―雲南永寧府と四川塩井衛への軍事行動
　第一節　従来の研究
　第二節　麗江府、永寧府、塩井衛、三土司支配地域の経界混乱
　第三節　1535（嘉靖14）年の明朝による調停
　第四節　1535（嘉靖14）年以降の展開
　まとめ
終章　中華世界とチベット世界の狭間で
関連年表
参考文献

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士後期課程

史料
要約（英語・中国語）
あとがき

本書の内容についてみると、まず序章では麗江の地理的・歴史的概要と明代の歴代木氏土司とその行動について触れ、従来の研究で明朝側及び木氏土司側の史料を根拠として明朝と木氏土司の関係を支配・被支配の関係と規定し、木氏土司を明朝の忠実な臣下としていることに対して、木氏土司側と中華世界側の史料に加えてチベット世界側の史料を用いてその問題点を明らかにするという本書の目的を述べている。第一章では、土司制度の概要及び土司の位置づけやその義務について述べたうえで関係する先行研究を紹介し、中華世界からの土司への視点だけではなく、土司自身や別の世界からの土司への視点についても考慮することで、従来明らかにされることがなかった西南少数民族の首領たちの姿を読み取れることができると論じている。第二章では、木氏土司側の史料としての『木氏宦譜』と中華世界側の史料としての『皇明恩綸録』についての性格および先行研究を紹介したうえで朝貢・回賜・軍役・助餉の4点からそれぞれの記載内容を表におこして比較検討を行い、両史料の内容が概ね一致していることを明らかにして両史料の信憑性が高いことを述べている。第三章では、史料から木氏土司の明朝に対する朝貢・賦税・軍役・助餉の履行について検証を行い、制度としての規制力が弛緩していたにもかかわらず朝貢を継続するなど忠臣的な行動がみられる一方で他の土司が支配する地域へ向けて軍事行動を行うなど非忠臣的な行動もみられることを紹介し、明朝と木氏土司の両者の関係を支配・被支配の関係と規定できるものではないという新たな問題点を提示している。第四章では、前章の問題提起についてまずチベット人地域に対する軍事行動について触れ、明朝にとってチベットは敵対勢力であったことから木氏土司が同じく明朝に朝貢しているチベット人勢力に対して軍事行動を行っても咎めなられなかったことを述べるとともに、木氏土司がチベット地域での占領地において末端の集落まで掌握して税を徴収していた歴史的事実をチベット側のチベット語文献を用いて論じている。第五章では、木氏土司とチベット仏教カルマ派との関係について、これまでの研究者による占領地の政治的支配のために宗教を利用したという見解は一面的であるとし、木氏土司側の史料とともにチベット語史料を用いて木氏土司とカルマ派の両方の立場から比較検証を行い、両者が「施主・福田」の関係であったことやチベットから見た木氏土司は独立した仏教的価値観に基づいて尊敬されるべき王と認識されていたことを論じ、明朝との関係からだけでは見えない木氏土司の姿を明らかにしている。第六章では、同じ土司支配地域である永寧府や塩井衛に対する軍事行動による対外拡張について従来の研究では理由の説明が不十分であるとして、まず関連する史料を用いて木氏土司の対外拡張の実態とそれに対する明朝の対応について紹介し、木氏土司の軍事行動に対して明朝から介入や征討を最後まで受けなかったことを明らかにした。そして終章では、これまでの論述で明らかになった点を整理したうえで、木氏土司に対して永寧府の占領行為を責めるよりも木氏土司がチベット勢力を抑制しているということを明朝が重視してその占領行為を黙認していたことについて述べ、明朝と木氏土司は従属度の高い一方的な支配・被支配の関係というよりも相互に依存し合う関係が成立していたと捉えるべきであると論じている。またチベット世界に対しても仏教を盛んにする「施主」としてお互いに依存し合う関係にあったことについて述べ、中華世界とチベット世界に挟まれた木氏土司が両世界に対して相互依存関係を打ち立てることができていたことを論じ、さらにそこから土司支配地域が中華の徳の及ぶ地域であったとする見解は中華側から見た側面であって説明不足であり、本書が明代土司制度研究に対して新

たな側面を提示したとの考えを述べるとともに、チベット仏教世界の歴史的研究の一つにも加えられると述べてまとめている。

本書ははじめにも述べたように、これまでの研究で用いられてきたナシ族や中華世界の漢文史料に加えてチベット世界のチベット語史料も用いて明らかにしているところが特筆すべき点であり、これによって従来までの研究による明朝による木氏土司の支配という見解に対して明朝およびチベット世界との相互依存関係が構築されていたという新たな視点が論じられ、土司制度研究やナシ族の歴史研究においてはもちろん、ナシ族の文化研究においても今後新たな視点がもたらされると考えられる。従来の研究ではナシ族は茶馬古道による交易などによって中華世界とチベット世界との関係を維持しながら両者の文化を巧みに自文化に吸収してきたという説明が一般的であったが、本書の研究によって明らかにされた新しい歴史的背景による交流を考慮した文化研究が進むことが今後期待される。また、史料に記載されている内容について論じる際に比較対照表を用いて整理して提示することでその相違点が視覚的に理解できるようにされていて、歴史学を専攻しない読者にも論点が解り易いように書かれている。

本書は当該地域に関する歴史学研究者はもちろん文化人類学など他分野研究者も一考察すべき内容であり、著者が最後で述べている明代後の清代期の木氏土司の周辺勢力との関係構築についての考察や、明代において麗江で仏教関係行為がおこなわれなかった点からの木氏土司とチベット世界との関係についての研究が今後進むことが期待される。

（A5判　201頁　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　2011年3月発行）

会　告

比較民俗研究会のロゴマークの募集

比較民俗研究会では、会の発足20周年、会誌25号発刊、研究会100回開催などを踏まえ、この機に会の趣旨や活動を端的に表すロゴマーク、シンボルマークを作り、会誌や研究会、シンポジウムの折、封筒のデザインとして使うことを考えました。良いデザインがありましたら是非、提案してください。研究会の折などに、寄せられたマークを検討し、合意をみたら決めたいと思います。

◇会名：　（和）比較民俗研究会　　（英文）Comparative Folklore Society
◇誌名：　『比較民俗研究』　　"Comparative Folklore Studies"
◇応募：・一件につきA4判用紙一枚に図版、説明を記載。色は、複色でも可
（印刷は、単色となる）
・〆切り2011年度末、月例の研究会ごとに区切ります
・良いマークがない場合、随時の提案に切り替えます
・海外同人の斬新な発想に期待します
・会の活動などは、HPを参考にしてください
http://hikakuminzoku.web.fc2.com/index.html